



「一番大切なもの」

西尾 勉（信友会）

NHKの「心の時代」という番組で、藤井美和という方のお話を聞きました。この方は、関西学院大学で「死生学」を教える先生です。

最初にご自身の体験を話されました。28歳の時、急性多発性根神経炎という病気で体の麻痺が進み、わずか三日間で、まばたきも出来ない全身麻痺の状態になり、息苦しくなっていく中で、主治医から「今晚はどんなことでもするから、とにかくがんばりなさい」と言われたというのです。そして翌朝になり、こんどは「藤井さん、もう死にませんよ、でも、悪ければ一生寝たきり、一年後に車いすに乗れたらいい方だと思ってください」と言われたというのです。この方はクリスチャンホームに育ち、幼児洗礼を受け、信仰告白をしているクリスチャンです。このときまで仕事に打ち込み、充実した人生を送ってきたと思っていたのに、このとき、「今まで何のために生きてきたのか」また、「このまま生きていて良いだろうか」と思い苦しんだといいます。（この苦しみは、死生学でいうスピリチュアルな痛みです）このような苦しみと、多くの方の支えを経験して、死に行く人のケア、ソーシャルワークを学び、現在の仕事をされています。

ようやく本題に入りますが、それは死生学の講義の内容です。学生たちに本当に大切なものを知ってもらうために死の疑似体験をしてもらう。それは、健康であった21才の学生が突然ガンに冒され亡くなっていく、その過程を経験するというものです。学生にはまず、「形のある大切なもの」「大切なアクティビティ（活動）」

「大切な人」「形のない大切なもの」を三つずつ、合計12の大切なものを紙に書いてもらい、ガンの進行に伴ってその中からあきらめていくものを一つずつ破っていきます。そして最後に残った最も大切な一つを破り、最後に伝えたいメッセージを書き残して、ワークは終了します。

私たちは人は必ず死ぬことを知っており、自分にも必ずその日が来ることを知っています。しかし、死について考えるということは単に生物学的な死を理解することではありません。死を含めた生き方を考えることなのです。死の疑似体験は最も大切なものを知ると同時に、いつか私たちはそれらのものを手放していかなければならないことを教えてくれます。

このワークの目的「死を受けとめ直す」は実は「生き方を問い直す」ことでもあります。それは自分自身が何を大切に生きるかという価値観、死生観、生命観を問い直すことです。それによって自分の人生を最後まで生きるという課題に向きあうことなのです。

藤井さんの声は暖かくて、聞き手をまるく包み込むようなやさしさがありました。テレビを通しての出会いなのに、わたしには実際にお会いしたような印象が残りました。そして私自身、何を大切に生きるかを深く考える時が与えられ、心から感謝しています。

「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい。」
（コリントの信徒への手紙一 16章 13～14節）